

本書の特長と利用法

■本書の特長

この問題集は、全国の難関私立大学の入試問題から古文（融合問題を含む）十六題・漢文三題の良問を精選した、実戦トレーニング用の問題集です。

各問題の冒頭には出題大学の試験時間・配点をもとに割り出した〈制限時間・配点〉や、難易度の目安（★☆☆標準レベル・★★☆やや難レベル・★★★難レベル）を表示してあります。別冊に掲載した各問題の解答・解説は、駿台予備学校講師が執筆したものです。これに、さらに〈採点基準〉を加え、実戦的な練習ができるように編集してあります。

ここに収められた十九題に取り組むことで、難関私大の入試を突破するために必要な、読解力と設問への対応力を養い、志望校合格を果たされることを願ってやみません。

■本書の構成

〈問題編〉〈記述解答用紙〉〈解答・解説編〉の3冊子に分かれています。

■本書の利用法

① まず、〈問題編〉の最初に示した〈制限時間〉内で、ひとり問題集を解いてください。

——これは〈速く解く〉ための練習です。

② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、もう一度じっくり読んでください。本文の理解が深まったところで、解答についても、勘違いや見落としがなかったかどうか、もう一度考え直してみよう。

——これは〈きちんと考えて解く〉ための練習です。①と②とをくりかえすうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんと考えて解く〉ことができるようになります。

③ 最後に、〈解答・解説編〉を見て、〈解答・採点基準・解説〉を参考に、自分の解き方を点検してみよう。

——これは、自分の解き方の欠点を自分で見つけ、修正する練習です。この練習をくりかえし、〈自分の答案を添削していく力〉をはつきりさせて、〈次に問題を解くときには注意しよう〉と意識化していくことが、〈これまでミスしていた設問に正解できるようになる〉つまり〈得点力を上げる〉ための道なのです。

④ 文学史や文法事項などの知識を問う設問で誤ったものについて、その日のうちに復習し、覚えておくようにしましょう。読解設問については、しばらく日をおいて〈解答・解説の内容を忘れかけたころに〉もう一度同じ手順でやり直してみるのも効果的です。

目次

■古文編（＊は融合問題）

第1回 かくて、人憎からぬ様にて、……………4〔2〕中央大学

第2回 うたたねに恋しき人を見てしより……………8〔6〕明治大学

第3回 かかることを母おとど聞きたまひて、……………12〔9〕立命館大学

第4回 こころにまかせたる身ならば、……………18〔13〕早稲田大学

第5回 内裏より夜まかでて、清水に詣でたるに、……………22〔17〕中央大学

第6回 帝は、月日の過ぎゆくも、……………24〔21〕関西大学

＊第7回 世尊寺、古めかしき寺にて、……………30〔25〕早稲田大学

＊第8回 関の東よりは、たよりの風につけて、……………34〔30〕早稲田大学

第9回 朝成の君と一条殿と同じ折りの殿上人にて、……………40〔36〕学習院大学

第10回 そらさや内裏へ参り、女院の御前にて、……………44〔41〕同志社大学

第11回 かくて年月行き交ふほどに、……………48〔44〕同志社大学

第12回 高野に年ごろ知り給へる聖あり。……………52〔48〕立教大学

第13回 中比、甲斐国に嚴融房とか申しける学生、……………56〔54〕上智大学

第14回 春宮の御方はじちの母君よりも、……………62〔58〕立教大学

第15回 これも徒歩よりなめり。……………68〔64〕上智大学

＊第16回 昔、紀有常がり行きたるに、……………74〔68〕早稲田大学

■漢文編

第1回 楚人有涉江者。……………78〔72〕明治大学

第2回 孔子晨立堂上、……………80〔74〕立教大学

第3回 儒者伝書言、……………84〔77〕立命館大学

〔 〕は「解答・解説編」の頁 ■出題大学（一部改編した問題がある。）

第3回

『篁物語』

★★☆

立命館大
解説 9ページ

30分

50点

次の文章は、『篁物語』の一節である。主人公の男（大学のぬし・兄）は、異母妹である女（妹）と恋仲になり、女は男の子どもを身こもる。その話を聞いた母は激怒して、女を部屋に閉じ込めてしまう。これを読んで後の問に答えよ。

かかることを母おとど聞きたまひて、ものものたまはで、うかがひたまひて、向かひたまひたりけるを、手を取りて引きもて行きて、部屋にこめてけり。これを父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、「男をのこもかしこき者にて、女幼き者にあらず。さしたるやうあらんな。なほ許したまひて、のたまへ」とありければ、「おのが身を思ふとて、のたまふに」とて、いよいよ鍵⑦の穴に土塗りて、「大学のぬしをば家の中に入れそ」とて、追ひければ、曹子ざうしにこもりゐて泣きけり。妹のこもりたる所に行きて見れば、壁の穴いささかありけるを、くじりて、「ここもとに寄りたまへ」と呼び寄せて、物語して、泣きをりて、出でなまほしく思へど、まだいと若くて、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをるほどに、夜明けぬべし。男、数ならばかからましやは世の中にいと悲しきはしづのをだまき返し、

いささめにつけし思ひの煙こそ身をうき雲となりて果てけれと言ひて、泣きあへりけり。

夜明けにければ、曹子に帰りて、この女食ひつべきやうに、ものを調じてもて行かんとするに、

心まどひて、足もえ踏み立てず、もの覚えざりければ、むつまじく使う雑色ざふしきを使にて、「ただ今心地あしくてえ参り来ず。そのほど、これ食すきたまへ。ためらひて参らん」。女、穴のもとにて待つに、^⑦かく言ひたれば、

誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめめ

取り入れず。帰りて、「かくなん」と言ひければ、かしこくして、またまた行きて見れば、三、四日ももの食はで、もの思ひければ、いと口惜しく、息もせず。「いかがおはします」と言ひければ、

消え果てて身こそは灰になり果てめ夢の魂君にあひ添へ返し、

魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなば何にかはせん

とて、よろづのことを言ひて泣けど、いらへせずなりにければ、「死ぬ」とて泣き騒げば、^⑤声を聞きて、解き開けて見れば、絶え入る気色を見て惑ひ出でて、ほかの家に往にけり。親出でてのちに、出でて、率あて入りて見れば、死にて臥せり。泣き惑へどかひなし。その日の夜さり、火をほのかにかきあげて泣き臥せり。^④あとの方こそめきけり。火を消ちて見れば、添ひ臥す心地しけり。死にし妹の声にて、よろづの悲しきことを言ひて、泣く声も言ふことも、^⑦ただそれなりければ、もろともに語らひて泣く泣くさぐれば、^④手にだにあたらず。ふところに掻き入れて、わが身のならんやうもしらず、臥さまほしきことかぎりなし。

泣き流す涙の上にありしにもさらぬ別れにあはにむすべる

女、返し、

常に寄るしばかりは泡なれば^⑦つひに溶けなんことぞ悲しき

といふほどに、夜の明けにければ、なし。

親は捨てて往にければ、とかくをさむることはただこの兄ぞしける。人は皆捨てて行きにければ、ただこの兄、従者三、四人、学生^{がくやう}一人して、この女の死にける屋を、いとよくはらひて、花、香たきて、遠き所に火をともしてゐたれば、この魂^{たま}なん夜な夜な来て語らひける。三七日はいとあざやかなり。四七日はときどき見えけり。この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法華經を書きて、比叡の三昧堂にて、七日のわざしけり。その人、七日はなし果てても、ほのめくこと絶えざりけり。三年過ぎては、夢にもたしかに見えざりけり。なほ悲しかりければ、初めのごとしてなんまかせたりける。妻にも寄^⑦らでひとりなんありける。

〔簗物語〕より

40

注 「おのが身を思ふとて、のたまふに」 〓 「あなたのことを心配だからということ、（父君はあのよう） おっしゃったのに」

曹子 貴族の邸内にある個人用の部屋。

しづのをだまき 〓 「いにしへの倭文^{しづ}の苧環^{をだまき}いやしきもよきも盛りはありしものなり」〔古今和歌集〕を踏まえる。

雑色 〓 蔵人^{くらうど}所の下級役人。男に下男として仕えている。

かしこくして 〓 普通ではないと思つて。

をさむること 〓 葬儀。

学生 〓 葬儀をとりおこなう僧侶。

三七日、四七日、七日 〓 二十一日、二十八日、四十九日の追善供養の法事を行う日。

35

問1 傍線アの「さしたるやうあらんな」、キの「手にだにあたらず」を、それぞれ現代語訳せよ。

問2 傍線イの「泣きけり」、ウの「言ひたれば」、エの「聞きて」の動作の主体は誰か。最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号を答えよ。

- 1 父 2 母 3 親 4 兄 5 妹 6 雑色

問3 傍線オの「あとの方そめきけり」の意味として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号を答えよ。

- 1 死んだ後に男はめそめそしていた
2 足もとのほうがざわざわしていた
3 後のほうは落ち着かぬようだった
4 裏では何かがささやきあっていた
5 時間が経って何か物音が起った

問4 傍線カの「ただそれなりければ」の意味として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号を答えよ。

- 1 やはり死んだ様子であったので
2 まことにあの世の人だったので
3 ただただ泣くばかりだったので
4 まったく妹のようであったので
5 何よりも身近に感じられたので

問5 傍線④に「つひに溶けなん」とあるが、何が「溶け」というのか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号を答えよ。

- 1 冷たくなった自分の身体
- 2 肉体から離れ漂う霊魂
- 3 生まれ消えゆく人間の命
- 4 自分を恋する兄の気持ち
- 5 ほんのひとときの逢瀬

問6 傍線⑤の「この魂なん夜な夜な来て語らひける」という行動につながる気持ちが述べられている部分を、本文中からそのまま抜き出して、十字以内で書け。

問7 傍線⑥の「妻にも寄らで」の意味として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号を答えよ。

- 1 妹とは添い遂げなくて
- 2 わが妹とは交際できず
- 3 他の女性には寄りつかず
- 4 妹の霊魂には近づけず
- 5 他の女性とは結婚せず
- 6 妹には寄り添うことなく

問8

本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号を答えよ。

- 1 父はおだやかな人だったので、二人の子どもの将来を思ってその恋を認めようとした。
- 2 母は妹を部屋に閉じこめたが、その後兄がひそかに訪れ来る音に目覚めて声を上げた。
- 3 兄は二人の仲が認められぬのは身分が低いゆえと考え、わが身の上をひどく悲しんだ。
- 4 兄は妹の食事を作ったが、うろたえて最期まで妹のもとを訪ねることができなかった。
- 5 妹は何度か壁の傍に寄って兄と語り、和歌を交わした後返事をしなくなってしまった。
- 6 妹の魂は生前にも夢の中で通っていたが、亡くなった後も三年間はそれが続いていた。

古文3

『篁物語』

得点

／50
点

問1

ア

キ

問2

イ

ウ

エ

問3

問4

問5

問6

問7

問8

古文編3 『篁物語』

解答・配点

(50点)

問1 ㊦ 特別な事情があるのだろうか

(5点)

㊦ 手にさえも触れない

(5点)

問2 ① ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

(各4点)

問3 2 問4 4 問5 5

(各4点)

問6 夢の魂君にあひ添へ

(各4点)

問8 3・5

(各4点)

採点基準

問1 〈各5点〉

㊦ 「特別の事情」ができていれば5点。

▼ 「あらんな」がの訳が間違っていたら、2点減点。

㊦ 「だに」の訳ができていれば5点。

問6 〈4点〉 ㊦ 別解なし。▼ 誤字・脱字は、各1点減点。

出典

『篁物語』の一節。『篁物語』は『小野篁集』『篁日記』『小野篁記』などとも呼ばれた、平安時代の物語。平安初期に歌人・文人として名高かった小野篁を主人公とする。歌物語性の濃厚な第一部と、説話文学的な傾向がある第二部からなる。第一部は篁の異母妹との恋が語られ、篁の子を身ごもった妹が母に仲を裂かれて死に、亡霊となって現れるというもの。第二部は右大臣の娘に求婚した篁が、大君や中の君には断られたが、三の君と結婚して栄達を遂げるというもの。問題文は、第一部の終わりの部分である。

解説

問1 〈傍線部の現代語訳〉

㊦ 「さしたる」は、下に打消の語を伴って「たいして」と訳す場合と、打消の語を伴わないで「(特にこうと思ひ決めた) 特別の」と訳す場合がある。ここでは、下に打消の語がないので、「特別の」と訳すのがよい。「やう(様)」は、「様子」「状態」「事情」などの意味を表す。「ん」は推量の助動詞。「な」は詠嘆の終助詞。ここは、父親が、兄妹なのに結ばれてしまったことに対して、「男」は「かしこき者」であり、「女」は「幼き者」ではないのだからといった言葉に続くことから考えると、「特別な事情があるのだろうか」と、二人をかばった言葉であることが分かる。

㊦ 「だに」は類推の副助詞、「さえも」と訳す。したがって、正解は「手にさえも触れない」となる。

問2 〈動作の主体判定〉

① 傍線部①の前の内容を確認する。母は、父が二人のことを許してもよいようなことを言っているのを聞き、ますます怒り狂って、女を閉じ込めた部屋の鍵穴に土を塗り込めて、「追ひければ」とある。母が女を閉じ込めたのは、男と女を引き離すためである。つまり、ここで追い払われたのは男であると理解できる。男は、追われて、自分の「曹子」に籠って「泣いた」のである。したがって、正解は4。

㊦ 傍線部㊦の前の部分の内容を確認する。夜が明けたとき「曹子」に帰って、料理を持っていこうとした人物は、「曹子」とあることから考えて、男であると推測できる。男は母に追われて「曹子」に籠って泣いてから、一旦、女のところに行って共に壁越しに語り合ってから、再び「曹子」に戻ったのである。男は女のところを料理を持っていこうとしたが、「もの覚え」なくなつたので、雑色を使いとして「ただ今心地あしくてえ参り来ず」と言わせた。女は待っていたのだが、使いである雑

色が男の伝言を告げたので、女は自分は見捨てられたと思ったのである。
 ㊦「言ひたれば」は雑色が男の伝言を告げたことを言っている。したがって、正解は6となる。

㊧ 男は女が「いらへ（返事）」をしなくなったので、「死ぬ」と言って泣き騒いだ。その声を聞いて、部屋を開けたのは、女を閉じ込めた親である。㊨は、それが父親であるのか、母親であるのかは決めることができないので、3の「親」が正解となる。

問3 〈傍線部の意味〉

「そそめく」とは、何かが音を立てている様子をいう。「あと」は「足処」の意味で、「足跡」「足もと」と訳すことができる。したがって、正解は2となる。「あと」の意を正確に理解するのは難しい。

問4 〈傍線部の意味〉

「ただ」は物事と物事との間に隔たりのないほど一致している様子を表す。「それ」とは死んだ女を指す。したがって、正解は「まったく妹のようであったので」とある4となる。

問5 〈内容把握〉

女の歌の解釈から考える。「常に寄る」とは女が生きていたとき、何度も重ねた二人の「逢瀬」を指す。その「逢瀬」さえ「泡」のようにはないので、女が死んでしまった今、「つひに溶けなん」ことは悲しいと言っている。歌の意味が分かりにくいので、「溶けなん」の主語もなかなか想定しにくい、女が生きていたときの「逢瀬」と対比されているので、死んでしまった今回の「逢瀬」が主語となることが分かる。したがって、正解は5となる。

問6 〈心情把握〉

問題文が指示する「『この魂なん夜な夜な来て語らひける』という行

動につながる気持ち」とはどのようなものを探させようとしているのか、理解しにくい。これを分かりやすく言い換えると、「女」がどのように思ったから、「この魂なん夜な夜な来て語らひける」ということになったのか、女の心情が述べられている部分を、本文中からそのまま抜き出して、十字以内で書け、ということになる。つまり、女が魂となつて毎晩会いに来ようと言っている部分を、十字以内で探せばよい。このように問題の意図が理解できれば、女の歌の中に「夢の魂君にあひ添へ（夢の中では、私の魂よ、あなたに寄り添っておくれ）」とある部分が該当することが分かる。

問7 〈傍線部の意味〉

男は、女が魂となつて現れ続けるのが悲しく、また、三年が過ぎて「夢の中」にも女が現れなくなったことも悲しく思ったので、「妻にも寄らでひとりなんありける」という状態であった。傍線部の直後に「ひとりなんありける」とあることから考えると、「妻にも寄らで」は別の女とつき合うことはなかったということであると分かるが、該当しそうな選択肢は3「他の女性には寄りつかず」、5「他の女性とは結婚せず」の二つがある。3と5の違いは微妙であるが、「妻」とあることから、「結婚」について述べていると考えられるので、正解は5となる。

問8 〈内容合致〉

本文の内容が分かりにくいので、問8を手がかりにして、もう一度本文の内容を確認するとよい。正解は3と5。以下、各選択肢を検討する。
 1に該当するのは、「これを父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、『男もかしこき者にて、女幼き者にあらず。さしたるやうあらんな。なほ許したまひて、のたまへ』とありければ」である。父が「おだやかな人」であることは合っているが、「二人の子どもの将来を思つて」という部分が異なる。父が二人の恋を認めたのは、「男もか

しき者にて、女幼き者にあらず。さしたるやうあらんな」とあるように、男も女も分別があるだろうからである。

2については、「母は妹を部屋に閉じこめたが」という部分は合っているが、「その後兄がひそかに訪れ来る音に目覚めて声を上げた」という部分については、該当する箇所が見つからない。

3に該当するのは、男の歌である「数ならばかからましやは世の中にいと悲しきはしづのをだまき」である。「しづのをだまき」とは、『古今和歌集』の「いにしへの倭文の苧環いやしきもよきも盛りはありしものなり」を受ける表現。「倭文」を織るための苧環（糸巻き）を「しづのをだまき」というが、「倭文」の「しづ」と「賤」の「しづ」とが同音であることから、「いやしい」を導き出す序として用いられた。男は、自らが「しづのをだまき（賤しい身分）」であることを嘆いているのである。したがって、3は本文の内容に合っていると理解できる。

4に該当するのは、「曹子に帰りて、この女食ひつべきやうに、ものを調じてもて行かんとするに、心まどひて、足もえ踏み立てず、もの覚えざりければ」である。「兄は妹の食事を作ったが、うろたえて最期まで妹のもとを訪ねることができなかった」は、ほぼ合っているのだが、「最期まで」が合っていない。「雑色」が帰りて、『かくなん』と言ひければ、（男は）かしこくして、またまた行きて見れば」とあるように、男は、はじめ女のところに訪れることができなかったが、その後、訪れて、女が死んでいくまで女の側で語り合っていた。

5の「妹は何度か壁の傍に寄って兄と語り、和歌を交わした後返事をしなくなってしまう」というのは、男と女との間で交わされた贈答歌があるので、「妹は何度か壁の傍に寄って兄と語り、和歌を交わした」という部分が合っているのは明らかである。また、「返事をしなくなってしまう」は「よろづのことを言ひて泣けど、（女は）いらへせずなりにければ」とあるので合っている。

6「妹の魂」が「亡くなった後も三年間はそれが続いていた」とあるのは、「三年過ぎては、夢にもたしかに見えざりけり」とあるので、合っていない。また「生前にも夢の中で通っていたが」とあるのも、問題文に該当する箇所を見いだすことができない。

現代語訳

このようなことを（娘の）母君はお聞きになって、何もおっしゃらないで、様子をうかがいなさって、（娘と男が）向かい合っていらいしたのを、（母は娘の）手を取って連れて行って、（娘を）部屋に閉じ込めてしまった。このことを（娘の）父君はお聞きになって、（父君は）おだやかな性格の人だったので、「男も賢い性格の者だし、娘も幼い者ではない。特別な事情があるのだろうよ。やはり（娘を）お許しになって、（娘に）お話をして下さい」と言ったので、（母君は娘に）「あなたのことを心配だからということ、（父君はあのように）おっしゃったのに」といって、いつそう鍵の穴に土を塗り込んで、「大学の君（＝男）を家の中に入れてはいけない」といって、（男を）追い払ったので、（男は）部屋に閉じこもって泣いた。（男が）妹（＝女）が閉じこもっている所に行くと見ると、壁の穴が少しあいていたのを、穴をひろげて、「こちらに近寄って下さい」と（女を）呼び寄せて、語り合っては泣いて、（女は部屋から）出たいと思うけれど、（女は）まだたいへん若くて（どうしたらよいのか）分からないので、嘆いていると、何とも出来なくて、たいへんつらいと思って、話をしているうちに、夜が明けてしまったのだろう。男が、自分が一人前だったらこんな扱いを受けるだろうか、いや受けないだろう。この世の中で大変悲しいことは身分が低いことであるなあ。（女は）返歌をして、

かりそめに点けた恋の火の煙は、雲になったが、私の身も空に浮かぶ雲のように消えてしまうことだよ。

と言って、二人は泣き合っていた。

夜明けになると、(男は)部屋に帰って、この女が食べられるように、食べ物をごしらえて持つていこうとすると、気が動転して、立つことができず、茫然自失となってしまったので、親しく使っている下男を使いとして、「今は気分が悪くて参上できません。この間(「私が来られない間」、これをお食べください。落ち着いたら参上しましょう)」。女は穴のところで待つていたが、(男が)このように言うので、

誰かのため(に生きながらえよう)と思う命があるのならば、消えてしまふに違いない我が身を惜しんでとどめようとするけれども(あなたに見捨てられたのならば、私は生きていくことができません)。

(と言って、男が寄こした食べ物)を受け取らなかった。(下男は)帰って、「こうである」と言ったので、(男は)普通ではないと思つて、また行ってみると、(女は)三、四日ものも食べないで、物思ひをしていたので、大層残念なことに、息も絶え絶えであった。(男が)「どのようでありつしやるのか」と言つたところ、(女は)

消え果てて我が身は灰になつてしまふでしょう。しかし、夢の中では(私の)魂よ、あなたに寄り添つておくれ。

(男は)返歌をして、

魂は我が身をかすめないほど微かなもので、君(の魂)が我が身と交わつたとしても、(それを)何にすることができようか、何にすることもできない。

と言って、いろいろなことを言つて泣くけれども、(女は)返事もしなくなつてしまったので、(男は)「(女が)死んでしまふ」と言つて泣き騒ぐと、(親たちが)声を聞いて、(女を閉じ込めた部屋を)開けて中を見ると、(女が)死にそうになっている様子を見て、外の家に行つてしまった。(男は)親が出て行つた後に、(下男を)連れて部屋に入つて見ると、(女は)死んで倒れていた。泣き惑うけれども、甲斐がない。(男

は)その日の夜、火をほのかに焚いて泣き伏していた。足もとのほうがざわざわした。(男が)火を消して見ると、(誰かが)そこで寄り添つて寝ている感じがした。死んでしまった妹(「女」)の声で、いろいろと悲しいことを言つて、泣く声も言うことも、まったく妹のようであつたので、(男は)ともに語らつて泣きながら探つてみても、(女の体は)手にさえも触れない。懷に抱きしめて、我が身がどうなるかも分からず、ともに臥していたという気持ちは限りがない。

(あなたが死ぬ前は)泣き流す涙の上にいたけれども、(今は)死という避けられない別れによつて、泡のようにはかない関係が結ばれていることだよ。

(女は)返歌をして

いつも寄り添つていた短い時間の間でも泡のようにはなかったので、(今回の逢瀬も)最後には(泡のようには)溶けて消えてしまふことが悲しいことだ。

という間に、夜が明けたので、(女の姿は)消えてしまった。

親は(女を)捨てて出て行つてしまったので、あれこれと女の葬儀の手配はただこの兄(「男」)がした。人は皆捨てて行つてしまったので、ただこの兄は、従者三、四人、僧侶一人で、この女が死んだ部屋を、大層丁寧に破つて、花を供えて、香を焚いて、遠いところに火を点して座つてみると、この女の魂が毎晩毎晩やつて来て(男と)話をした。三十七日(二十一日)は大層鮮やかであった。四七日(二十八日)はときどき姿が見えた。この男は、涙が尽きることなく泣いた。その涙を硯の水に使つて、法華經を書いて、比叡山の三昧堂で、七七日(四十九日)の法要をした。その女は、七七日の法要が終わつても、かすかに姿を現すことが絶えなかった。三年過ぎて、夢にもはっきりと見えなくなった。(男は)なお悲しい気持ちだったので、初めて姿を現した時と同じように(女の魂の)したいようにさせていた。他の女性とは結婚せず、一人でいた。

第2回

『説苑』

★★☆

立教大
解説
74
ページ

20分

20点

左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。

孔子^{あしたニ}晨^ニ立^ニ堂^上、聞^ク哭^{スル}者^ノ声^ノ音^ノ甚^ダ悲^{シキヲ}。孔子^{（注2）}援^{（注3）}瑟^{（注4）}而^{（注5）}鼓^{（注6）}之^{（注7）}、其^{（注8）}音^{（注9）}同^{（注10）}也。孔子^{（注11）}出^{（注12）}而^{（注13）}弟子^{（注14）}有^{（注15）}吒^{（注16）}者^{（注17）}。問^{（注18）}「誰^{（注19）}也。」曰^{（注20）}、「回^{（注21）}也。」

孔子^{（注22）}曰^{（注23）}、「回^{（注24）}為^{（注25）}何^{（注26）}而^{（注27）}吒^{（注28）}。」回^{（注29）}曰^{（注30）}、「今^{（注31）}者^{（注32）}有^{（注33）}哭^{（注34）}者^{（注35）}、其^{（注36）}音^{（注37）}甚^{（注38）}悲^{（注39）}。」

非^{（注40）}独^{（注41）}哭^{（注42）}死^{（注43）}、又^{（注44）}哭^{（注45）}生^{（注46）}離^{（注47）}者^{（注48）}。」孔子^{（注49）}曰^{（注50）}、「何^{（注51）}以^{（注52）}知^{（注53）}之^{（注54）}。」回^{（注55）}

曰^{（注56）}、「似^{（注57）}完^{（注58）}山^{（注59）}之^{（注60）}鳥^{（注61）}。」孔子^{（注62）}曰^{（注63）}、「何^{（注64）}如^{（注65）}。」回^{（注66）}曰^{（注67）}、「完^{（注68）}山^{（注69）}之^{（注70）}鳥^{（注71）}生^{（注72）}」

四^{（注73）}子^{（注74）}。羽^{（注75）}翼^{（注76）}已^{（注77）}成^{（注78）}、乃^{（注79）}離^{（注80）}四^{（注81）}海^{（注82）}、哀^{（注83）}鳴^{（注84）}送^{（注85）}之^{（注86）}。為^{（注87）}是^{（注88）}往^{（注89）}而^{（注90）}不^{（注91）}二^{（注92）}

復^{（注93）}返^{（注94）}一^{（注95）}也^{（注96）}。」孔子^{（注97）}使^{（注98）}三^{（注99）}人^{（注100）}問^{（注101）}哭^{（注102）}者^{（注103）}。哭^{（注104）}者^{（注105）}曰^{（注106）}、「父^{（注107）}死^{（注108）}家^{（注109）}貧^{（注110）}、売^{（注111）}子^{（注112）}

以^{（注113）}葬^{（注114）}父^{（注115）}。」將^{（注116）}与^{（注117）}其^{（注118）}別^{（注119）}也^{（注120）}。」孔子^{（注121）}曰^{（注122）}、「善^{（注123）}哉^{（注124）}、聖^{（注125）}人^{（注126）}也^{（注127）}。」

（『説苑』による）

(注)

- 1 堂上——建物正面の大広間の中。
- 2 瑟——樂器。琴に似るが弦の数が多く大型。
- 3 鼓——演奏する。
- 4 吒——嘆き悲しむ。
- 5 回——顔回の名。字は淵。
- 6 完山——地名。

問1

——線部の訓みとして最も適当なものを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 やうやく 2 つとに 3 みづから 4 やめて 5 すでに

問2

——線部(1)の訓読として最も適当なものを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ひとりにあらずしてこくしてしし
- 2 ひとりこくしてしするのみにあらず
- 3 ひとりしをこくするのみにあらず
- 4 ひとりにあらずしてしをこくし
- 5 ひとりこくするのみにあらずしてしし

問3

——線部(2)の解釈として最も適当なものを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 完山の鳥にはどんな言い伝えがあるのか。
- 2 完山の鳥はこういうふう鳴くのか。
- 3 完山の鳥に似ているはずがあろうか。
- 4 完山の鳥の行く先はどこなのか。
- 5 完山の鳥をどうすればよいのか。

問4

——線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ひなたちが旅立ったらまたもや帰ってこれなくなるからです。
- 2 親子とも旅立ったらもう二度と帰ってこないからです。
- 3 ひなたちが旅立ったらもう二度と帰ってこないからです。
- 4 親鳥が旅立ったらもう二度と帰ってこないからです。
- 5 親鳥が旅立ったらまたもや帰ってこれなくなるからです。

問5

——線部(4)の訓読として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 まさにそれとわかれんとすと。
- 2 まさにそのわかれにくみせんとすと。
- 3 まさにそれとわかるべしと。
- 4 もってそのわかれにくみせんと。
- 5 まさにそのわかれにくみすべしと。

問6

——線部(5)は何に對する評価を述べたものか。その内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ひとときわ悲しい泣き声に込められた「哭者」の情愛
- 2 泣き声の特徴から事情を推測した顔回の洞察力
- 3 師に事実を正確に知らせようとした顔回の誠実さ
- 4 「完山之鳥」の鳴き声を知っていた顔回の博識
- 5 子売ってまでも父を葬ろうとした「哭者」の孝心

した故事から、「無用な心配をすること」。正解は③である。

読み方

*振り仮名は、訓読みはひらがな歴史的仮名遣いで、音読みはカタカナ現代仮名遣いで示しています。

楚人^{ソヒト}に江^{コウ}を渉^{わた}る者^{もの}有^あり。其^その劍舟^{ケンフナ}中^{ちゆう}より水^{みづ}に墜^おつ。邊^{へん}に其^その舟^{ふね}に契^{きぎ}みて曰^いはく、是^{こゝ}れ吾^わが劍^{けん}の従^よりて墜^おつる所^{ところ}なり(と)。舟^{ふね}止^とまる。其^その契^{きぎ}みし所^{ところ}の者^{もの}より、水^{みづ}に入りて之^{これ}を求^{もと}む。舟^{ふね}已^{すで}に行^いけり。而^{しか}も劍行^{けんぎやう}かず。劍^{けん}を求^{もと}むること此^{かく}のごときは、亦^{また}惑^{まど}ひならずや。故^こ法^{ぽう}を以^{もつ}て其^その国^{くに}を為^なむるは、此^{こゝ}れと同^{おな}じ。時^{とき}已^{すで}に徙^{うつ}れり、而^{しか}も法^{ぽう}徙^{うつ}らず。此^{こゝ}れを以^{もつ}て治^ちを為^なすは、豈^{いか}に難^{かた}からずや。

現代語訳

楚の国の人に、長江を渡る者があつた。その男の劍が舟の中から水の中に落ちてしまった。(その男は)急いで乗っている舟(の船べりに目印を)刻んで言った、「これはおれの劍が落ちたポイントを示す目印だ」と。舟が(対岸に着いて)止まった。(男は)自分が刻んだ目印から、川に入って劍を探した。舟は既に先へ進んでしまった。しかも劍は(舟といっしょに)先へ進んではない。こんなふうにな劍を探すのは、なんとまあ見当違いではないか。古い法律を使つてその国を治めるのは、この話と同じことだ。時は既に移り変わっており、しかも法律はもとのままだ。こんな古い法律で国を治めるのは、なんとまあ困難なことではないか。

漢文編2 『説苑』

解答・配点

(20点)

問1	5 (2点)	問2	3 (3点)	問3	2 (4点)
問4	3 (4点)	問5	1 (3点)	問6	2 (4点)

出典

前漢の劉向の『説苑』。

解説

孔子が早朝に大変悲しげな泣き声を耳にする。弟子の顔回が、過去に鳥の同様な鳴き声を聞いた経験から、「死者のためだけでなく、生き別れになるものがあるために泣く声だ」と判断する。孔子が泣いていた者に質問すると、「父が亡くなりましたが、貧乏で葬式が出せません。子供を売った金で葬ることにになり、子供と別れるところなのです」と答える。孔子は、人の悲しみを深く理解する顔回を「聖人だ」と讃えた。親の葬式が出せないのは、子としての最大の不孝だと考えるのが儒教である。よって、漢文を読んでいると、このようなエピソードに時折出会ふことになる。漢文の世界では、孔子を「聖人」と呼ぶのに対して、高弟の顔回を「亜聖」(聖人に次ぐ人)と呼ぶことがある。

問1 〈語の読み〉

多品詞語「已」については、第1回の問1です、学習した。ここでは、直後に動詞「成」があることから、この動詞にかかる副詞の「すでに」と判断する。「羽と翼がすでに完成して」と訳してみても、矛盾しない。

問2 〈書き下し〉

「非独」は、「独りゝのみに非ず」と読んで「ただゝだけでなく」のように訳す累加の形である。

○累加形

不独ゝ 独りゝのみならず

非独ゝ 独りゝのみに非ず

豈独ゝ 豈に独りゝのみならんや

不唯ゝ 唯にゝのみならず

非唯ゝ 唯にゝのみに非ず

豈唯ゝ 豈に唯にゝのみならんや

*唯＝惟・但・只など

どの形も英語の *not only* に相当し、「ただゝだけでなく…」のように訳す。この句形から選択肢2・3・5にしぼる。「哭死」は、直後の「哭生離者」に対応する表現なので、これと同様に〈動詞＋目的語〉として「死を哭す」と読む。正解は3。

解釈・書き下しのいずれが問われても、ただ傍線部内の句形だけでなく、傍線部外の対句や対応表現を見つけてこれと比較することも、大きなポイントになるのが普通である。

問3 〈現代語訳〉

「何如」は、「いかん」と読んで「どのようか」と状態を問う表現で、「如何」は「いかにせん」と読んで「どうしようか」と方法を問う（文脈によっては「どうしようもない」と反語に訳す）表現である。選択肢2の「どういふうに」が、傍線部の「何如」をふまえた解釈になっており、これなら前後の文脈にも矛盾しない。

問4 〈現代語訳〉

傍線部の「不復」は、「復たゝず」と読んで「二度とゝしない、もはやゝしない」のように訳す否定の慣用表現であり、選択肢2・3・4がこの表現に沿った解釈になっている。さらに傍線部の前の文「羽翼ゝ送之」から、親鳥が成長した子鳥を見送ることが読み取れる。よって3の「ひなたちが旅立ったら」が正しい解釈だとわかる。これなら「父死ゝ別也」という「哭者」の返答の内容に照らしても矛盾しない。

問5 〈書き下し〉

「将」は、「まさにゝんとす」と読んで「（いまにも）ゝしようとする」のように訳す再読文字。これで選択肢1と2にしぼれる。「与」は多くの用法を持つ多品詞語だが、直後に名詞があるときにはその名詞から返って「ゝ」と読むケースが多く、これが入試でも最もよく問われる。「其と別る」と読めば、「子供と別れる」と訳すことになり、前後の文脈にも矛盾しない。正解は1。

問6 〈文章全体の趣旨にかかわる内容説明の問題〉

漢文に限らず国語問題の最後の設問は、文章全体の趣旨にもかかわるものが問われるのが普通だ。決して傍線部とその前後だけの判断で解答してはならない。文章全体を確認しよう。悲しげな泣き声が聞こえた↓顔回が死者のためだけでなく生き別れになる者があるための泣き声だと判断する↓孔子が当事者に確認をとる↓顔回の判断が正しかったことが判明する、というのが話の流れである。孔子は、何に対して「すばらしい、聖人だ」とコメントしたのだろう。正解は2となるはずである。

読み方

*振り仮名は、訓読みはひらがな歴史的仮名遣いで、音読みはカタカナ現代仮名遣いで示しています。

孔子^{コウシ}晨^{アサ}に堂上^{ドウジョウ}に立ち、哭^{ウク}する者^{もの}の声音^{セイオン}甚^{はな}だ悲^{かな}しきを聞^きく。孔子^{コウシ}瑟^セを援^タりて之^{これ}を鼓^コするに、其^その音^{おと}同^{おな}じなり。孔子^{コウシ}出^デでて弟子^{テシ}に吒^タする者^{もの}有^あり。問^とふ、「誰^{たれ}ぞや」と。曰^{いは}く、「回^{カエ}なり」と。孔子^{コウシ}曰^{いは}く、「回^{カエ}の爲^{ため}にして吒^タするや」と。回^{カエ}曰^{いは}く、「今^{いま}者^{もの}哭^{ウク}する者^{もの}有^あり、其^その音^{おと}甚^{はな}だ悲^{かな}し。独^{ひとり}り死^シを哭^{ウク}するのみに非^あず、又生^{オウ}離^リの者^{もの}を哭^{ウク}す」と。孔子^{コウシ}曰^{いは}く、「何^{なに}を以^{もつ}て之^{これ}を知^しるや」と。回^{カエ}曰^{いは}く、「完山^{カンザン}の鳥^{トリ}に似^にたり」と。孔子^{コウシ}曰^{いは}く、「何^{いかん}か」と。回^{カエ}曰^{いは}く、「完山^{カンザン}の鳥^{トリ}四子^{ヨウシ}を生^ウむ。羽^ウ翼^{ヨク}已^{すで}に成^なりて、乃^{すなは}ち四海^{シカイ}に離^{はな}るに、哀^{アイ}鳴^{メイ}して之^{これ}を送^{おく}る。是^これ往^ゆきて復^{かへ}た返^{かへ}らざるが爲^{ため}なり」と。孔子^{コウシ}人^{ひと}をして哭^{ウク}する者^{もの}に問^とはしむ。哭^{ウク}する者^{もの}曰^{いは}く、「父^{ちち}死^シして家^{いへ}貧^{ひん}しく、子^こを売^うりて以^{もつ}て父^{ちち}を葬^{はな}る。将^{まさ}に其^それと別^{わか}れんとす」と。孔子^{コウシ}曰^{いは}く、「善^よきかな、聖^{セイ}人^{ジン}なり」と。

現代語訳

孔子が早朝大広間に立って、慟哭する者の大変に悲しげな泣き声を耳にした。孔子が瑟をとって演奏すると、同じような音に聞こえた。孔子は大広間から出ると弟子の中に嘆き悲しむ者があった。(孔子が)「だれだ」と問うと、「回でございます」と返事があった。孔子が言った、「回はなぜ嘆き悲しむのか」と。回は言った、「いま、慟哭する者がありますが、その泣き声が大変に悲しげです。死者のために慟哭しているだけではございせん。加えて生きながら別れる者に対して慟哭しているのでございせん」と。孔子が言った、「どうしてそんなことがわかるのかね」と。回は言った、「完山の鳥(の鳴き声)に似ているのでございせん」と。孔子が言った、「(完山の鳥の鳴き声とは)どのようなものなのかね」と。回が言った、「完山の鳥が四羽のひなを生みました。(ひな鳥が)羽や翼がすでに完成し、そこで世界に飛び立つ時に、(親鳥は)悲しげに鳴いてこれを見送るのです。ひなが飛び立ってしまえば二度ともどってこな

いことを思うから(悲しげな声になるの)です」と。孔子が人をやつて慟哭する者にわけを問わせた。慟哭する者は言った、「父が亡くなりましたが家が貧乏なもので、子供を売って(その金で)父を葬るのです。いままさに子供と別れようとしているところなのです」と。孔子は言った、「すばらしいねえ、(回)は聖人じゃ」と。